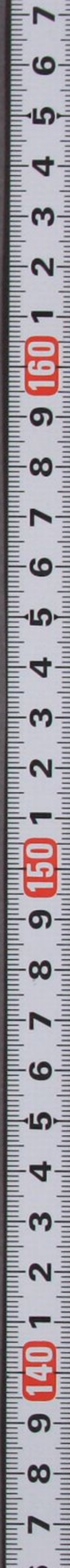
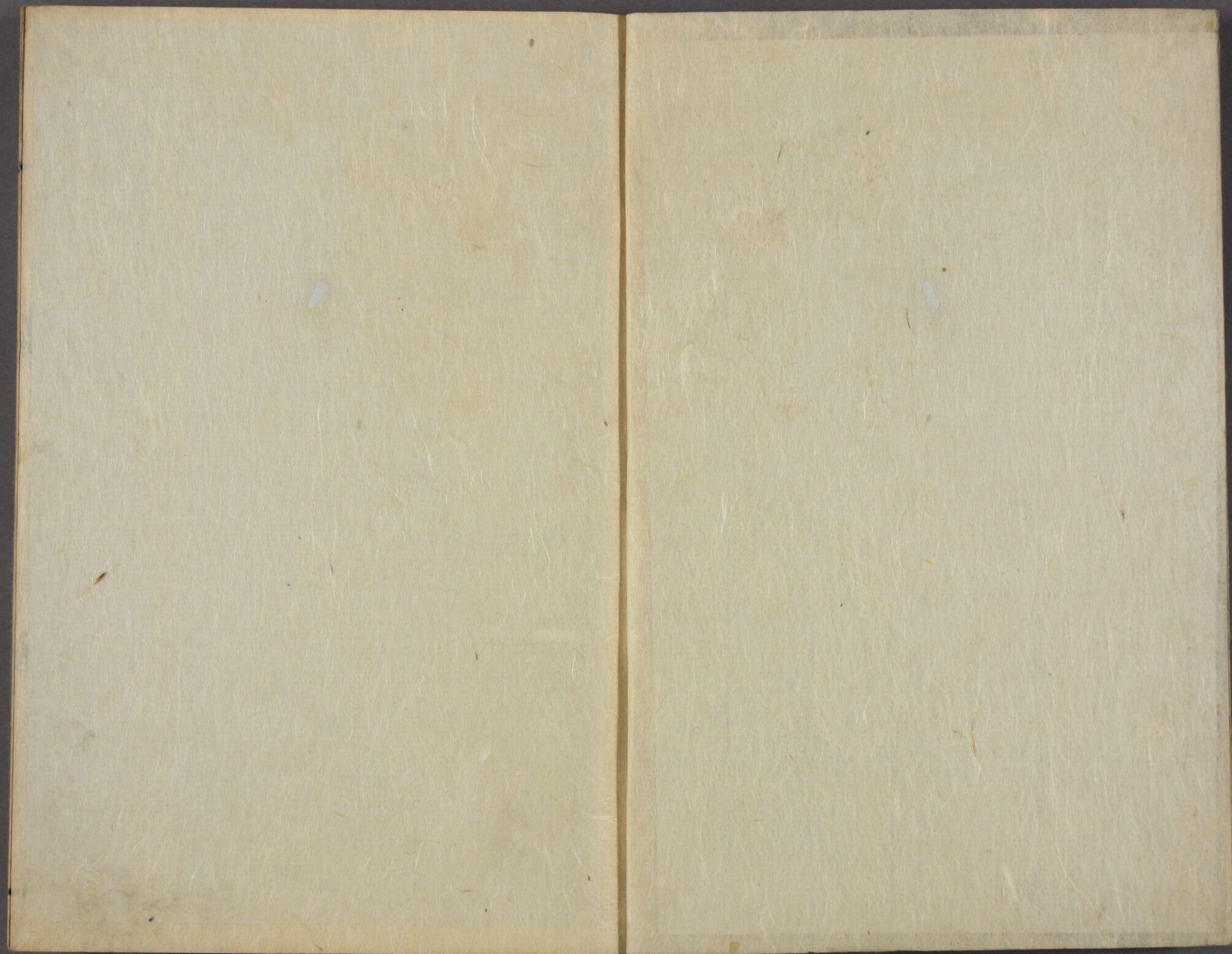


古今集遠鏡

一







を後ニ序

このを後ニ序の世にわんわんといひてしよふ
序の世のしよふへしよふからしよふこの世に
よの世に釋ちしよふあしよふとらしよふが
いふとらしよふとらしよふとらしよふとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら



わが心はなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて

あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて
あはれみはなほおもひのこりて

古今集巻鏡

やむれぬとそりたこしむきもとそわかづと

うけぎばあにみゆらもみぢうら

此書の古今集はあざと紙ごとくくいるは昔乃俗サレヒゴト俗クツに譯せ
 ぬしそごとく此集のよゆ物よりさきりし人なれちうさくとも
 のりもあまてしものさるゆもたけむいふ今さうけのさるる
 うねいづとゆわふは位釋といふまぢらふもまをいとまかきるさ
 ん乃指さともはわりとづりらほのふふもさどその本とよふらや
 先もどうぬをその心ちうに里人の時書はつる本はよるとにもよ
 くえさうふさうかどらとくひうらむら何の本ささ本と

きとつら。花咲おらとるどハ。花が咲タワイと。かきさふげたのけあおやし。さ
べて信さふがといふことなき。雅さけぞをさ。きくハ。かといつら。花咲き。里
あどハ。花チイ里と。ノをさ。又さ。まき。信をべきも。人。けり。さ。ぬ。きて
さゆ。む。あ。せ。の。ち。り。を。ま。ど。信。さ。け。あ。て。ハ。か。に。ら。ら。し。

○泪のそ。け。を。お。ま。さ。へ。て。う。つ。を。ま。さ。こ。お。わ。し。あ。き。を。さ。や。お。く。心。静。ム
あどハ。熟。る。成。上。へ。う。し。郭。々。ハ。め。り。オ。ホ。ウ。セ。テ。ア。ヤ。ウ。ニ。唱。カ。と。信。し。よ。り。さ
へ。見。よ。し。て。は。月。夜。も。ヨ。ル。デ。ヨ。上。テ。月。ノ。影。ガ。テ。ラ。ス。と。う。つ。し。ち。き。さ。お。お
を。あ。お。う。う。ま。お。し。め。ぐ。ひ。き。こ。う。を。上。お。う。し。て。コ。ゴ。ロ。ハ。イ。ロ。く。ト。お。お。ノ
シ。ゲ。イ。フ。カ。ナ。と。信。し。う。う。ま。び。く。も。ん。し。る。か。あ。ハ。見。る。を。上。へ。う
は。し。て。見。ワ。タ。シ。タ。ト。コ。ロ。ガ。キ。ツ。ウ。マ。ア。物。サ。ビ。シ。ウ。ス。元。フ。カ。ナ。と。信。さ。し。め。ぐ。ひ。あ。て。これ

雅ミヤコトさしサトミコト信サトミコトさしサトミコトつやうつやうけけぐぐひひしし又又てておおををももささららををかかへへ信信
ささべべききつつりり。ああののううののああおおままささななくくおおどど。ああののううののままおおぞぞととぞぞとと
どどハハ上上おおああべべききととおおどどりり。ささののううののああおおままささ下下おおおおりり。たたをを信信をを
ももららううををええてて信信ををままききしし。此此信信まましし。告告めめしし。ぬぬべべしし。

○てておおををををけけるる。ぞぞももどどハハ信信ををままきき信信ををままきき。ハハままぞぞままおおららああひひらら。
ののどどんん。信信おおカカをを入入るる。ぞぞももどどハハ信信ををままきき。ハハ花花ががいいひひてて。もも不不おおちちううとといいきき
てて。いいききああひひままてて。雅雅信信ののぞぞおおままおおららととおおるる。ささちちううははおおいいききああひひハハお
ららハハままおおららべべくくももううととざざれれババ今今ハハササとといいふふ辞辞をを信信をを信信てて。ぞぞおおああてて。花花ガガササ昔
ノノままとと信信ををままきき。ぞぞももどどハハ信信ををままきき。ハハ花花ががいいひひてて。もも不不おおちちううとといいきき
花花ををちちららめめねねささへへううととままややおおらら。ややううおおむむてて。いいふふ。ううららハハままおおらら。いいふふとと

も何どく。とらり。今一つ心風おこもみさるべらおき。おとのとてそ花ハ
ちうめ。あどのとらひ乃こそ。うつこも。何き。こらりぞ。おいとちうきれ
を。ぞの。係。う。よ。わり。は。風。お。ぞ。き。う。音。との。と。ぞ。き。う。といひ。う。む。ふ。う。く
ぢ。お。と。び。い。も。つ。う。さ。ま。じ。お。び。して。い。う。う。お。き。ぢ。め。き。も。お。う
む。と。さ。ま。じ。お。び。に。う。さ。う。お。こ。い。し。い。お。が。神。お。ま。う。う。や。どの。梅。ぞ。と。さ。い。お。も
さ。う。か。あ。お。じ。の。い。も。び。の。と。も。た。ハ。ア。と。澤。き。ア。ハ。や。が。て。け。と。の。結。と。う。
お。ぞ。わ。う。む。お。ひ。の。や。も。ど。ハ。倍。倍。う。ハ。倍。カ。と。い。お。倍。の。ほ。き。う。う。お。う
ら。お。わ。う。い。の。も。て。へ。う。う。と。い。お。喜。や。さ。な。花。や。お。と。き。と。ハ。喜。が。早。イ
ノ。カ。花。が。オ。ソ。イ。ノ。カ。と。澤。き。お。び。う。う。

○んも。倍。き。お。も。と。て。倍。ウ。と。い。お。ま。ん。ゆ。ん。と。コ。ウ。イ。カ。ウ。と。い。お。お。こ。

きんたん。ん。あ。どの。ん。も。何。ど。花。や。ち。り。き。ん。ハ。花。が。チ。ツ。ダ。ア。ラ。ウ。カ。花。や。ち
ア。な。ん。と。花。が。チ。ル。テ。ア。ラ。ウ。カ。と。澤。き。さ。て。け。チ。ツ。ダ。と。い。お。と。チ。ル。テ。と。い。お。と
の。う。う。と。お。も。て。き。ん。と。ち。ん。との。ま。ぢ。ち。を。と。さ。さ。さ。べ。う。さ。て。又。倍。り
つ。き。さ。う。お。う。う。お。わ。う。ん。と。ま。ま。う。う。う。う。う。お。う。う。も。と。を。ん。ん。を。え。よ。
ち。り。お。ん。後。ぞ。ち。う。ん。お。お。お。あ。どの。と。ら。ひ。人。へ。つ。き。後。へ。つ。き。お。お。え
ほ。び。き。て。ん。ハ。倍。な。う。う。お。ま。お。お。お。倍。倍。う。の。と。お。お。ん。人。ハ。チ。ツ。テ。後。ニ。
チ。ル。お。お。ノ。と。や。お。い。ひ。て。見。ヤ。ウ。人。ハ。チ。ル。テ。ア。ラ。ウ。後。ニ。チ。ル。テ。ア。ラ。ウ。お。お。ん。な。どの。い。い。と
さ。と。お。し。お。お。お。此。お。お。と。さ。い。ひ。て。ん。ら。ん。ら。ん。の。こ。ら。け。こ。お。う。お。澤。き。さ。と
と。な。う。う。お。お。ん。後。ぞ。ハ。オ。ツ。ケ。チ。ル。テ。ア。ラ。ウ。ガ。ソ。ク。お。お。後。サ。と。澤。き。ち。う。ん
小。野。の。も。サ。マ。テ。は。ゴ。ロ。ハ。お。お。花。が。チ。ル。テ。ア。ラ。ウ。が。も。せ。ん。と。や。お。澤。き。さ。べ。う。お。

きざしと信使おさついでるが中へおうと。ほどあとおがく。おとねとち
かくもらんら乃橋をぬと。ふノ橋ハ底ガカクテアルデアラウニと譯してよ
ろしく又うぬん人きんよぬども。んヤウトオラスハと。うつまば。信使りも
かへ。おちまゐりにりて。ハカクヤウおも。うつまば。

○らんウツヒの澤はらまど。つり。おし。おの。おやまらん。おん。風ガトカステア
ラウカと譯も。アスウらん。おわ。り。カ。上の。ヤ。おわ。り。いつの人。お。うつまひ。お
ん。まど。イツヒ。ニ。お。テ。ニ。ウ。タ。ヤ。ラ。と。譯も。ヤ。ラ。らん。お。つ。ま。り。人。お。ま。り。ま
ぬ。む。や。ま。らん。ま。ど。ハ。人。ニ。レ。サ。サ。花。ガ。お。タ。カ。レ。ヌ。と。譯も。カ。レ。ヌ。ヤ。と。らん
と。お。わ。り。ま。り。又。上。お。や。お。ま。ど。つ。ま。り。お。し。お。し。お。ま。り。と。お。わ。り。ま。り。
お。ハ。ド。ウ。イ。フ。デ。と。つ。お。お。ま。り。と。つ。お。し。お。し。又。お。お。の。ゆ。お。つ。け。ま。り。

コガシ。らん。人。や。ま。り。ま。ま。の。お。し。お。し。人。ガ。お。イ。ヤ。ラ。声。ラ。ア。ゲ。テ。ヒ。ヌ。ラ。ナ。ク
と。つ。ま。り。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。
ヤ。ラ。ハ。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。
人の。ま。ま。り。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。
と。譯。して。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。
と。つ。ま。り。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。

○らん。ハ。サ。ウ。チ。と。譯。も。サ。ウ。チ。ハ。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。
つ。ひ。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。
あ。ら。る。辞。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。
サ。ウ。チ。と。共。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。お。し。

おいむむ業ありんとら〜きき〜と難ひのまに〜
 らぬてみぐ〜おちあももろ〜もてよむあ〜
 ゆ〜しんの時ぬがフルサウしぬぬあ〜
 アラウとサウナとのいぬぬしてその〜
 ○か^哉あ〜び〜めりカチとい〜
 されがまは〜び〜ぬをび下上〜
 して譯をべ〜ま〜此辭の^{ナゲキ}難島のぬを〜
 及とび^{カシ}譯り〜そのあ〜このぬを〜
 ○[○]は〜の譯は〜り〜又君のあ〜
 へ〜る〜と譯して下あ〜

け〜ハ、お下おぬら〜とら〜
 ○きりきりきり〜ハ、ワイと譯は〜
 お〜〜ま〜そのぬび〜もワイを〜
 ぞ〜ぬ〜わわ〜き〜ハ〜
 ○た〜なる〜なる〜ハ、ヂヤ〜
 〜〜〜あぬ、あぬ、あぬ〜
 〜〜〜あれば、後、後、後、後〜
 ぬあれむ、こま、アレ、居、ガ、カ、ル、ワ、アレ、松、虫、ノ、声、ガ、ス、ワ、お、ぬ、譯、を、べ〜
 と譯をた〜り〜ハ、別^トして、譯のつけ〜

河よりうき此あるに切なり河よりうきちびなりし。

○ぬねるつづき... 既ぬねる入るに... 河よりうきちびなりし。

○あえれをアハレと傳き... アハレキツウ荒タノイと傳き... 河よりうきちびなりし。

橋へやらドモシ... 河よりうきちびなりし... 河よりうきちびなりし。

○大くさいあへん乃ち海今のまは^{ササ}後池ううつまぢゆはきてり
程いとぬわしにこももいもまうしどよみのいこもさう後をなまきうへても
ちり福とみまむしうし今ハいこもかきいさうつこのまじ又今まぢゆ
ぬまての^{カクシ}澤がとれ中おちぬやう考へまづいまきうしうよくつれ
るこもまぢゆいぞくもまぢゆいぬりもまぢゆのいこもいこもいこも
づりぞいもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりも
まぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりも
まぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりも
まぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりも

本居宣長

やあやううう人の心をまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりもまぢゆいぬりも

○哥ト云物ハ人の心ガタ子ニツテイロクノ詞ニサナツタモノヂヤワイ

世中ニカウヒテ危人ト云モノハイロクト事ノ多イモノヂヤニヨツテソノチニヤカ
ヤノ事ニツテテ心思フコトヲソノ時ニル物ヤ聞物ニツテ云ガレタノヂヤ

花ノ枝ヘキテ鳴ク鶯ヤ水ニスニテアル蛙ヤナドノ声ヲキケバソレクニ面白イ
トコロハ皆哥ヂヤスレヤ生テアルホドノ物ハ何が哥ヲヨマヌゾ類畜ル

イマデ皆々ニシレクノ哥ヲヨムヤワイノ

ちかききといふはしつゝ何れつらばうごかしきふんぬおふゆ
きも何れ後と思ひせきささぬあききとやうききぬけきもの
のふりこころききとねぐさむるいふなり

○チカラモ入レズニ天地ヲウゴカシタリ 目ニ見ヌ鬼ヤ神ヲ感じサシタリ

男ト女トノアヒダラムツマシウナルヤウニシタリ アラクシイ武士ノ心ヲヤハラゲ

タリナドスルモノハ哥ヂヤ

このうゝあをつらばしききとむる時らりいざきふりり

○サテハ 哥ト云モノハ 天地ノハジマツタ時カラデナタワイ

いふはききはのきふてめ神を神とねりぬつてこといつてき

○ソレハカノ伊弉諾伊弉冉ノ事カ 天ノ浮橋ノ下デ 此夫婦ノ神ニオナリ

ナサレタコヲオヨミナサレタ哥ノコヂヤ

ちうちもどと云フ一はこゝろあつむさうとねわめしつゝあつて
ふひめふちづゆり

○サウヂヤケレド シツカリト哥ト云テ世中ニツタハツテキタノハ ひまの天デハ

下照姫ト云神カラハジマリ

あつてゝむえとハあめらみこねめねりせつとの神のあつてを
う谷ふりつてかやくをよきえいびもうとねるべしとねるはと
トねるきもあつてはあつてのやうおもつてぬこゝろと

○下照姫ト云神ハ 天若彦ト云タ神ノ内ニシツテアツタ ソノ哥ト云ハ 下照姫

○アレイクモ雲がタツタ^ニアノ出ル雲ノハミ垣ワイノ^三吾妻ヲ入レル宮ノタ
メ、アレ雲ガハミ垣ヲ作ツタ^五アノハミ垣ワイノ

いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、
かくてぞ花をきでも、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、
ふと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、

○サウシテサ 花ヲ賞^一祝シタリ 春ヲウラヤシダリ 花ヲ感^二ジタリ 春ヲ
愛シタリスルヤウチ心詞ガオホウサヤ^三ニナツタモノチヤワイ

そわきそわき、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、
いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、
まであひの、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、

○キツウ遠イ取デモ タツタ一足^一フミダス足モトカラ始マツテイク月モ何羊モ
カルホドノ取^二デモユキ 又キツウ高い山デモフモトノチリホコリホドノ土カラ^三返
返^四ツツテ雲ヲタナヒクホド高ウチヤウチ物デ^五ハミモノフトホリナ物デアラウ
難波は乃^一いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、

○サテ難波津ノ哥ハ天子ノ出^一ラヨシダ哥ノハジメチヤ
たまごた乃みうど、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、
いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、
この花を梅乃、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、いづと、

○難波津ノ^一ト云ハ 仁徳天皇ノ難波津ニ^二花をナサレテ皇子ト申シタ

そのむらさきをいづれにまへにおおきまのみやうにけしきくさるる

○ソノ六イロト云ツハソヘウカノ仁徳天皇ヲオヨソヤシタリ

たふおづおほやこの花をいづれにまへとおほくやくはるる

○雑波津ニサクコノ花が 三 サアモウ春サキガヤト云テサクコノ花が

といつたやうなべー

○ト云ヤウチガサクデアラウ

おほくさかきかきへー

咲花くおほいつくまはあたまのうしろのうしろのうしろのうしろ

○咲テアル花ニウツカリト云ヘテ居ル者ノサチモイハルコトイノ 身ニ心ガナコ

トノテケケケルモシラスニサ

と心るるおほい

こころをいづれにまへにおおきまのみやうにけしきくさるる

いふいたはらうむらさきをいづれにまへとおほくやくはるる

といつたやうなべー

○けがへちト云ハ ちちちちちちト云テ 物ニタトヘナドモセヌモノガヤ ソレニ

けがむニト云ちラカガへちニおほくハ ドウ云心ガヤラガテガイカヌ 五番メ

ノタコトウタト云解へおほくガヤ けがへちニハ叶ウデアラウ

みのおほくさかきへー

おほくさかきへーとおほく乃おきていづれにまへとおほくさかきへー

○おへかヤ別レテ 二 起^{オキ}テイナシヤツタナラ ワレハ今カラ ちちちちちち

ゴトニ消ルヤウニ思テテタル^{トク}デカナアラウ 思ハハ一々思ガト^{トク}ツヨク

といつたるべし

こゝの抱おもぬまゝへてそまがやうぬねむあゝとやうおひじ
けあよりかまつりそとんしぞ

○けナスラへちト云ハ 物ニツラヘテも物ノヤウナト云ヤウニヨシダラ云チヤガ
け君ニケサト云ラハ ヨウ叶ウタトモ見エヌ

〜もめのおや乃くおこはまもごもろつおせくもつらう妹おつらびとて
○養^{カヒコ}蠶ノマニコモツテアルヤウニ 一 親ノヒザモトニ居テ外へ出ヌ娘ナレバ
ドウモエアハイデサテモく^シレニキナ^フカチ
かやうぬやこまぬかちおべり〜

○けヤウナ哥がけナスラへちト云ハサウデアラウカ
トろぬいぬま〜

コガ^カあま^カよ^カむ^カも^カつき^カど^カつら^カを^カ悔^カ乃^カ悔^カは^カま^カご^カハ^カよ^カつ^カら^カま^カと^カ
○タトヒ海ノ濱ノ砂ノ数ハヨミツラスト云テモオレが^カあ^カノ^カイ^カ救^カハヨミツラサレマイ
こゝのようが乃ま本もきごものぬはらてむをえま〜しけら
〜の^カか^カま^カ〜の^カら^カら^カむ^カぬ^カま^カは^カま^カど^カら^カの^カま^カへ^カち^カお^カら^カじ
やう^カら^カぬ^カま^カ〜の^カま^カを^カ〜の^カら^カぬ^カべし

○けタトへちト云ハ イロくノま本ヤもチカモノナドニヨセテ思フ心ヲ足セタモノヤ
ソレニ^カア^カが^カあ^カト^カ云^カラ^カカ^カラ^カタ^カ取^カチ^カナイ タトへちハ物ニタトヘテ云テアラハ云ハヌ
チヤニヨツテカクレタ取ガナウハヌマヌ チヤケレ^カ始^カメ^カノ^カノ^カ哥^カト^カ云^カト^カ同^カシ^カヤ^カウ^カナ^カチ

レバ スコレモヤウノカハツタチヲ出シタモノデアラウ

とぬれあはれ培やく煙風をいつと思ふなりとていふもまじき事なり

○スマノ浦ノ海主が塩ヲヤク烟ガ風ノガシサニ思ヒモヨラヌ方ハナヒイテイタイ

此よりおどやかあはれづくむ

○けちナドがタトヘチハ叶ウデモアラウカ

ワケにきくこと

いつたりあまきよけりせむいづむけり人乃とけ紫くけりかきま

○偽リト云フがナイ世中デアラウナラドレホド人ノ云テクル詞ガウレシカラウヅ

とつておどるべし

こまにあとのぞのありしやどーれをつおありこのまはこころさ

かゝるついでとせうとてやいふをくせ

○けちバコトチト云ハコトノト、ノウアタバシイノヲ云ヤ けいッリノト云哥心ハ子

カラ叶ハヌ けちハトメチト云物デアラウカ

山裾あはれで色減つたかき花ちりぢりくと風ぬくぬき

○山裾ヲ腹ハイ十分ニ見タサテモアリカタイノチ 花ノチルクラ井ノアライ風

モフカヌ ケツカウナ伊代デサ けちナドがタバコトチト云ハ叶ウデアラウカ

むつとついでいふ

けちのちうべもとみりてはきくをけりしをよらぬお殿づらりせり

○けち屋形ハゲニモれ繁昌ナラヤワイ け殿くノツミがけと 三 三

モ四ツモツバイテサテくケツカウナは普請ヤ

ふんて涙をいしてあふつけつゝあ涙くもてまろしめ流る

○昔ハ依代ノ天子様が春ノ花ノ時分ヤ秋ノ月夜ナド云々おとし小イッテモ ツメテ

居サツシカル衆ヲは前ヘシテナヅカガシムツテハ ちヲ上ルヤウニ作付ラセタ

アハハ花をこころしめてふよりおきさるるはよりまぢいあはハ月を思ふてま
あべまきやふとさうはるるは涙を流してさうあつことまろしめ流る

○サウニテ或ハ花ヲ見タウモテ ヨリツキモチ取ナドニテるまハツテアルイタリ

或ハ月ニ執心ニテ足ニ行テハ一カ出ヌサキヤ入テニウタアトヤナド 闇イノニ

案内モシラヌ取ヲアチラエコチエトヒテアルイタリスルヤウナ風流ナ心ヲソノヨシ

父哥デ考ヘテは流ナサレテソノちニヨツテ アレハカレコイ者チヤ アレハオロカナ

者チヤト云フヲ 流知ナサレタモヤウチヤ昔ハサ

花まろしめてとつよりやふとまろしめてよまでまべて風流

くはまろしめていへるは流る小徳流るまを思ふかふとれるハむが

くじまかあろり流るまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふ

してを考へあふおまもろしめてまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふ

今一つかゝるたを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふ

つひてやむべきまはつらげまを思ふ

あつらひのまわつらげまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふ

○サテ又サウガガデナニサレるまはつらげまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふ

よろろしびまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふまを思ふ

○又ハ身ニ過タヨロコビノアル時ヤ 心ニマルホドオモシロイマノアル時ヤナド

しとくちくわり

○アルハ昨日デハ繁昌シテ何ノ思ヒゴトモナカツタ者がニ分ニ不仕合せニナ
ツフナニギヲシタリ 又モトシタレカツタ中ガソエニナツタリシタトキ

阿ノハ松山の浪をかまゆ中けも波くも秋萩の下紫をながれ
わつつきれまぎらもまぐれをうごへ

○或ハ又末ノ松山ノ浪ヤ野中ノ清水ヲタトヘニシタリ 蕨ノ下紫ヲナガメ
タリ 噴ノ暗ノ羽根ガキスル数ヲカズヘタリ

阿ノハらと竹枝うねゆる人うらひうらむ川をひきて世の中
をうらむまきつふ

○或ハ竹枝身ノウイテ人ニハナレ 暮世川ヲタトヘニ引テ世中ヲ恨ニタリ

まきつふとつる何々の文とつひうねまどい

今ハゆいれゆもまかりしゆはまどねがりの橋と遠るゆりとき
く人を前にのぞんをたぐさめきぬ

○又今テハモウ番士山モ煙ノタヌヤリナリ 長柄ノ橋モ又新ニウお事タトマ
人ナドハ別ニテちヨムハツカリデサ心ヲハラシタフヤワイ

洗字ことを盡しこととるる洗ハむがてしゆー盡されむ洗きぬありとこ
きいへ洗字ゆりともいふほどとて雅志のうねりば定まぬ橋こ

阿ノ人よりかくはさつるうらふもねくの湯時とるぞちりやりぬき
あかのおちしよやまねくうねをちりーちりーちりりむ

○ズット昔カラ右ノ巻リ傳ハツテキタラチニモ奈良ノは時代カチ 別ニテヒロツタワ

イ 其は時代ニ定テ哥ヲヲヨクは悉知デアツタモノデカナアラウ

加のおんしゆりおんきみ川乃くくぬたのもやれ人まほなん
あはむどくとなりき

○まは世ニ正三位柿本ノ人磨ハ哥ノ聖人デサアツタワイ

あまハも人も身をけしうといふおるべー

○コレハコトニ君治合縣ト云モノデアラウ

秋乃ゆおを立田川ノおがもみぢまみうどの湯目ふ錦と
えほひ春はわいと吾聖心乃ゆくハ人まほがくろくハを
うとのまなんおんえとま

○秋ノユラグレニ立田川ニ流レルおほまバソテ奈良ノ帝ノ湯目ニハ錦ノヤウニは流ナサレ

春ノ初去世山ノ橋ヲ人磨昌心ニハ雲カトバツカリサ思ハレタワイ

又心のべ乃何人といふ人音多とあふあや〜〜〜ハありきと

○又山々ノ赤人ト云人がアツタワイ コレモ哥ニ妙ナ名人デアツタワイ

人オもつう人が、みふ〜〜む〜〜か〜〜つうむとハ人まほがきと〜
〜〜む〜〜か〜〜おきまきり

○人ニ口ハ赤人ノ上ニタツハナリニカララシ 赤人ハ人ニ口ノ下ヘオキニクイクラ

井ナコトデサアツタワイ

な〜〜み〜〜せ乃ゆ〜

〜〜川おまみ〜〜して海〜〜り〜〜〜〜バ海さうや〜〜ん〜
人まら

梅雪をよみてはるるをよみてはるるはあまのうきやうはまづくあまのうき
 ほのぐとつうの浦乃の雪お晴がらまゆくおをうきぞあま
 赤人

よき生小まきとつとちくく一かぞ生波あつと一よゆおき家

○春ノ野へスミレヲツマウト也ウチオレハオチガ
 アリノドカテ面白サニ此野デ
 サ一夜寐タライノ

こゝれ浦かあみちらくはかくまねと生波あつと一よゆおき家

○若浦へシホガミチクバ干涙がサニ芦原ノ方ヲ持テ鶴ガ鳴テワタルアレ
 此くく波おきて又まづとくく人もくも秋はよくおきとくく
 のよらとくくふくおえむとくくまきさる

○此二人ノ外ニモ又スレタ人ハ伏見代々伏見時々エサツアソタライ

あまのうきとちまきあまをわひあてするむあえうきとくくとくくきく
 くりあま。

○サテ奈良ノ代時代ニテノ哥トモヲ集メテ新葉集トササ歌号ヲツチラセタライ

くくふくくく人のあまのうきとくくまねとくくあまのうきとくくあまのうき
 ありにまうあまのうきとくくあまのうきとくくあまのうきとくくあまのうき

かの陽時よりこのくく事ハくくとせアガア世ハくくきにまむおりあま

○其は時代カラコチ八年ハ百年アリ代ハ十代ニサナルワイ

くくふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ぐくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ぐくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

とろろとひりたむとる

○其間ニ昔ノモ哥ノヲモヨウ知人ヨシ人ハタツサニハナイ
二人ト云ホドノテアツタ　チヤカソレモ　タガニ得タトコロト得又トコロガサアツテ
カノ人麻呂ヤ赤人ホドニ十分難ノナイ名人トハイレヌ

今けり沢つしおはくさくさるゆる人まばくやまじやう形まばいさば

○サテ今其人ノヲ云ウチヤガ　まゆニ官位ノ高い人ノハ云ハるゑかナヤウ
ナ物チヤニヨツテソレヤノケテオイト

そのふりふちうきよふるのくまきとえとる人

○ハノ官位ノ高イ人ハナニニ近イ代ニ多ノ名ノヤタニハ
まねらう傍正遍昭ハあけさぬいえしきじもゆきとくさうしよと人を

あふりかまるとさう形をえていづうおんさくごかまごづ

○ミツ僧正遍昭ハあノテイハ得テアツタケレ　コトガヌクチイ　物ニタトテイハウナラ
繪ニカイトアルオヤヲアテセテナイコニヲウガカヌヤウチモノチヤ

後ミどり糸とるかきそふあまおふもかきとるまけちや那きご
まらまを乃小ざりおまななんむておふりいあまをむとらごむく
暖塚野むしてるよりおちてらるる

名ふれでくおまるをりぞ女やあられおちるまき人おくはあま
つらとらふけありむらひあめあけあわつてことむしやうびまがら
そん乃をたうてよあひのさまるがぶ

○在来ノ業平ノあハコロガアツテ何ガタラヌ　テウドニホガ花ノ色ハナラ

たてニホヒノ跡ツアルヤウチ

月やあゝぬきやむくはきぬぬ日ごとむしりともはきよして
大くハ月をもりてこれぞこのはのまば人乃おいと那ふもの
秘めぬはききききききききききききききききききききききき
ゆん^はふはやききききききききききききききききききききききき
あき人乃よき〜ぬき〜んがび〜

○文室、康秀方ハ何ハタクニテあノ舞ガソ何ト相違セヌ イハッアキンドノエイ
キル物ヲ着タヤウチモノガヤ

吹く〜おゆ〜べ乃まふはきききききききききききききききききき
你まきみくどの沸ふ心よ

昔你きかきききききききききききききききききききききききき
宇治山乃傍きせんをあとばききききききききききききききききき
ききききききききききききききききききききききききききききき

○宇治山ノ傍を撰ハ何カオクカウテソレテ始トハテトノツラアヒガツカリト
セヌ イハハ秋ノ月ヲ見ルニ曉ノ雪ノデ、キヌヤウチモノガヤ

且が春ハもこの〜川〜ききききききききききききききききききき
よき〜う〜おわ〜ゆ〜し〜秘〜を〜か〜こ〜ろ〜き〜を〜か〜よ〜り〜し〜よ〜く〜き〜し〜げ

○け人ハヨニダ哥ガ多ウハ侍ハラヌニヨツテアレヤコレヤヲ合ヌツガナラチバ
トクトハシレヌ

をの〜こ〜や〜ち〜ハ〜い〜ろ〜へ〜の〜と〜ち〜わ〜り〜ひ〜え〜の〜流〜ま〜り〜つ〜く〜れ〜る〜や〜う

ふてはよかりばいそふよに女乃おやめさうらうらふ、ふりは
よくぬまきうね乃あおまばるべー

○小野、小町、ハ昔ノ衣通娘ノ流ナキヤ、アヒテヤウデツヨウナイ、イハハ

エイ女ノナム取ノルニ似タ物ガヤ、ツヨウナイノハ女ノチユエデアラウ

あいつめまじや人乃そいつむまときりせをさりさうはし
もそいでうらふおちよの中村人のうらむうごりりる
まじぬまば身をうね茶の根を踏てまきあまらばいむまじ
そとほりむ光れあ

まじせまぐくべまよひまりまぐおのらまきあまらばいむまじ

大らとれらぬハ コトバオ そのまらいやーいむまきあまらばい

へふい人乃危れうげおやまめまがあ

○大友、黒主ハオモロイ取ガアツテ、ウノテイガイヤレイ、イハハ薪ヲ負テ井ル

ヤガオヤチガ、危ノ木ノ下テ休ニテ居ルヤウナテイチヤ

序ハ頗有逸興と云ふふりて、補つて
さるべし。此序ハハなれおある洞のまが、あまら

あひ出てあーはあハあうらむあつてうらまら人ハーらまや

あひいごまらりて、あてゆくむらへゆるあはたいやあまら

このわらわへそめなまきこゆるあまらああまらあまら
ろごりちやーにまきこのあ乃ごうかあやまらまら
あまらまらそのまらまらまら

○此外ニモ名ノアル人ハ野ニハヒロガツアル葛ヤ林ニシテウハエテアル木ノ葉ヤ

つ子名流つ、有をみよのくまぐらふおやきくして

○當年延喜五年四月十八日ニワラハ人ノ者ハ作付ラレテ

きしえうきうにひくぬあきうとみけくしをもちしやう
らくは終ひてりや

○万葉集ニ入ラヌイハ英ニ自分クノ事ヲモ集メテ差上ニスルヤウニト作

付ラレテサ

そまがわくふも梅をかききよりちりめしてほろくきんをきくも
ちりそくしきんえふいさまで

○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカサス哥カラウツタツテ 郭ニラキクハ 万葉ヲ折

ハ雪ヲ見ルハニテ四季ノ如

又は歌かえつきて思をかりひんをこいし

○又鶴亀ニツケテ君ノ長壽命ヲ長カトシテ祝ヒ申シタリ 其外ノ人ヲモ祝フタ哥

秋萩えらき成ては力をこいさほふいりていふ向をいのり

○又秋ノ萩ノ花ヤまのまヲ足テハ妻ヲ恋シウタマヒタノ事 名取山ニテ旅立

テ行テ手向ノ神ヲ祈ル事ナド

つゝハ喜ぶ秋をふもいづぬらさぐれき成をむえくせ終ひる

○アルイハ四季志ナドノ如クモイラヌイロクノ難ノ哥ニテヲサ撰ミニセイト係付

ラレテも逐リ撰ニテ集メタ

とてちうさちうまればづけて古々和奇集といふ

○こま歌歌合千首 是ノ歌カは巻 歌号ハ古今和奇集トツケタ

かくこのうびあけをえらぶにせし下あけくもえほどあはれ
ごらくをわやくはむりねきば

○カウニけな此集がふすまて 山ト 昔ノ撰集ノ跡モ断絶せず たまの ヨイ

哥が数オホクアツニツタコナレバ

いまの河を川乃瀬よりわきまもきくどらに流い乃い
をわとわきよはるびのそとるべき

○モウコレカラハ哥ノ風ノワレウカキツカヒモナウテ 次オニ此道ノ末長ウ繁

昌スレメテタイコバカリガサアアラウ

そとまらうとどくき花ふらひきくわくしてひまきき
のそ秋乃あはれをかくそきば

○サテ永トトモガ義ハ 仁の オモレイトコロモナイニ 仁 突テモナイ

名バカリ 秋の 上手ナヤウニ云ハヤサレルコナレバ

おのがきへみゆる三井も産がいとくまらういよわく浪家一徳也
なるべしそれとあれと似たり何ぞ書く女大井川亭にもよわく
みどく仁のそと後拾き集序ふと作をさうき結ぶるしわらう
伊勢が書ふゆい候の色はくそまらういよわくが申のめあせうこあ
こといつり横形も秋もよわく好べしといひ又或人といひ
そとまらういよわくあしは候なるべしおのがそと候そとがしと
いつても申書此文より候ありといひ今もあふ此あし川乃
うらわらるべしまらうの徳とまらういよわくいよわきをれき

沈み月ひる俗をまじき事ぬきいふべきよりいへば

のしん人乃みやふおそろしくをなれんいともあむ人と

○世間ノ人ノ聞トヨモナトアラウカト共レ又ラハ哥ノ思フ心モ恥カシケレドモ

ぬびくをれとらぬなく無乃おきぬハほくゆきこの言イ

おきくうまれてけすけぬあつげをきよけいびや

○拙者ドモがけ世ニ同レヤウニ生レアセテカウナ作付ラレアル時希ニ急タコト

ヲサくもくナツテモ居テモなぐ病テモサメテモ悦ビニス

むとよろぬくならぬいとせとあけりるまされるう印

○カ久麻呂ハトウウテニシラタケレ 哥ノ道ハノコテアルサテく難有イコトカナ

しらひらきうつりこもささのいむぬくひゆけりあそと

○コレカラ後タトヒ時代が延々カハツテドヤウニナリユクト云テモ

このうさむ若あまや けまやぎのおもふんむねの葉乃ちりう

せどしそまきのうろきくつらりものゆえくぞまねらば

○此集が若世間のしんタエウセスニくもく末長ウむら久レウ傳ハツ

テサ入アタナバ わまやの回宮ハ法のあをやまよりまだとる信あ

ぬべりりハ若きふくくまぬくバといへくまる信し

まねさぬもとちりあとのろけをえくじんよ

○末代ニ至テ哥ノヤウヲモヨク知リ物モ心得テアラウ入ハ

ちそら月波尺るがぶくけいあへまけあまき今そろひざし

せうと

○此集ヲ いづれを サテく結構ナ集チヤト云テ 天十月ヲ凡ルゴトクニ作ギタツトニテ
今ハ此當代ヲニヌハヌト云フハアルニイワサテ
千秋をいづれへといは後世よりいふべき
と云ふは此の時代の事なり

古今和歌集巻第一 巻終

春歌上

あまのうらふきうらきる日ら先

在系元方

年終うらふきハ昔に乃と一ニ世成るごとやいとをこもやいとむ
○年四ニ春ガキタワイ コレデハ 同レ一年ノ内ヲ去来ト云々モノデアラウカ
ヤツハリコトレト云々モノデアラウカ

あまのうらふきる日ら先 紀世

袂ひらひらしてむまびらうらむこやきる風まきうらむ乃風やそくらむ
○袖ヲヌラレテスクウタ水ノコホツテアルヲ 春ノキタム目ノ風ガフイテトカス

テアラウカ

歌さうば

よき人ーらむ

春の夜もさるやうにこみゆくせむしのうららきやうららき

○春ガキテ夜ノ夕ツタハドレドコヤツ 足バ吉野山ニテ雪ガフツテ

ナカク喜ノキキハエヌガ

二條后女乃らめはゆき

おれらあまのあふりらうららきもはらわさる涙のやうに

○マダ雪ノモツアル処へ春ガキタ早コダハ鶯ノ氷ツタ涙モモウトケルデアラウカ

歌ーらむ

よみ人あらむ

梅がえにきわらうららきも春のけやめまどといふと春のけやめ

○梅ノ枝へキテ居ル雪ハハヤ鳴ケレドマダヤウニ春ニテカケテ雪ガフツテ

春ノヤウニモナイ

春のけやめも春のけやめとていふと春のけやめ

おれらあふりらうららき

素性法師

よきおそバ花もやうむらうららきも枝のうららき

○喜ニオツタバ花ガヤトオラテヤラ 喜ノフリカツテアル木ノ枝デ喜ガナク

歌ーらむ

よき人ーらむ

んごうぬうそ光てそりきこびきこへぬおれらあふりらむ

○トウカフ花ノタヲはウ思ヒコニテ居ルガソユキヤヤラニテ 喜ニオツタバソ

マ、 喜サマダロクニ消ヌニソラツテアル木ノ枝ノ雪ガハヤ花ニエエル

○を後一

〇三三

此より古くすもさび三の句よりさうめべし。きりりれむおやけさ
かり。此格百紫おまきし。ゆきを此集のころおひりりて。いささうと
細き耳おきぬぬる。うさきをとさへあつらふ。さう後の人のうはの
ほどもはて。さうらふ改老さるおもるべし。ゆきごととさきばまてい
結のらむとかきつひさう。さきば結を一本おさやうとら
も。後よりおまわひをさひさう。改りさるおやあうん。

うさ人のいささくさねのおおきおわいさうちまきさきさき

二條后おまきまのみやまむねとさきさきさうめさ月之日

康秀が
おまふお先しておあせどらわひさか日ってりおぐさの
かーらふかりおまらるるをよぬをほひらう
オヨセアノバサレタ

ぬんやのやをひで

喜け日乃むらわわう。おるさどかいらおおとゆるごとびーに

○此節ノ春ノ日ノ光ノヤウナ雜有イハ惠ヲ蒙リマス私デゴザリマス也 年ヨリ

マシテカヤウ頭が雪ニナリマスハサ 雜義ニなしてスルコリマシタ物デゴザリマス

喜けふりきさひむき きのほろゆき

おらふらこの老もさうぬらおゆとび花おき里と花さうらさうら

○喜辰がタツテ木ドモノコノメモ張ル春ノコロハヤウニ雪ガフレバ 花ノチキ里

ニモサ 花ガチルワイ トニト花トスエル

喜けさかおららる ぬらうらおあおあ

喜やらねおやおさきとまうらむらぶひそいおあおあおあおあ

○ハヤ春ニナツタ^レバ、モウ花ガサキサウナ物チヤニマダサカヌハ、春ノ^キホトヨリ
早イノカ、花ノサクノガホトヨリオソイノカ、^ウツナリ^ニモウタラ、ソビドチラヤト
云コトガシレウニ、サテモニア^ウサヘナカヌ^レカチ

去のそぐめけうゝ
みおけしむらゝ

喜まぬとくもいへど、さうぐいも乃なうぬうだりにわじどき思ふ

○春ガキタト人ハ云ケレモ、^レダ^キガナカヌ、ナ^レモ^キノ^キカヌウ^ハイ^セデモ、オレハ

春デハアルマイトサセウ

花あはれまきふのまはち金のち
ほまらるゝ

春風おさらる、おけむらぶらうらうら、おほやまけらうら

○春ノ^初ニ谷ノ風ニアソコト、^レト^レ氷^とてくカラウチダス浪ハ、テウド^レ花ノヤ^とニ

エルダ、コレガ春ノハツ花ト云モ、^レア^ラウ^カ

きのととけり

花乃鳥を風けし、ゆりふらぶら、さきさきあべら、はや

○風ノ吹テ、^イク^ニ幸^便ニ、^レ花ノ香ヲコト^シテヤ^サシ^ラヤ^サシ^トガ^レテ^ル、^ニ案^内者^ニハ

大いふ里
スルチヤ

さきおちよりおま、さきさき、はまらるゝあゝ、はまらるゝあゝ

○谷カラ^ウ唱^テ出^テクル^キノ^声ガナクバ、^キタ^ト云^フヲ^シレ^ガシ^ラウ^ゾ

五系、棟梁

さきさき、お花もふらさぬ、やま、黒いもの、かき、さきさき

○春ニナツテモ、花モナイ山、中ノ里デハ、ナ^ニモ^ハリア^ヒガ^ナサ^ニ、^ウト^モナ^サ子^声ヲ

ニテサ 書ガナク

。み秋云。あや。もの。うら。ま。お。ど。き。の。か。く。し。つ。ま。こ。や。し。
ぞ。も。は。い。ま。の。う。ら。ま。へ。く。ま。る。て。あ。は。し。此。秋。お。わ。し。

影 づ づ づ

よみ人 一 一 一

おべちうく家内いきまばうぐいさのゆくまをうらねましくまきく

○ワレハ野ヘノ近イ取ニスニヒヨテ井バ 書ガヨウツテ 毎日アサカラキ、ニス

春日中ハウらなやまきそとあま乃つるもくまれと家ととあを控ア

○け春日野ヲバ今日ハ燒テクルナヨ 三 妻モホテアミテ居ル 家モキテ遊テ居ルホニ

かまがゆはらぶ火乃野も出て足よいまゆくうけりて日るまはとてむ

○け春日野ノ飛火中ノ番人ヨ 出テヤウヲ名テクレイ ソチハ此野ニ住テ居ルバ

タイカイ知レレアラウガ 一ウイクカガリアツテカラ 若菜ヲツニハホウツ

みふりハ松乃書くふまえぬくふまこも豊べりおくねつとまわり

○山ニハアレ書サヘミダキエズニアツテ 松ナドモ白ウニエルニ 京ハハヤメツキリト春

メイテ 野ヘニ人ガデ、 若菜ヲツムワイ

つづとらおしそまぬらふぬりぬ昨日とふくくばりつねはみてつむ

○一 オシナステドコモカモ 考ぬがミツ今日ハフツタガ アスニ日フツタナラバ オ

ホカタ若菜ガツル、クラキニナルデアラウホトニ 望へ出テも若菜ヲツムウツ

仁和のみやぢみふあましくる時り人ふじうね

終ひたる時

つるがよめまはれおふおてわうまはせとがころもでお言ハぬりつ

○ソモトへ進セウトぬジテ 野へ出テけ若菜ヲツミガ 神ノ外寒イコテ

袖へ香ガフリカツテサテクナギヲ後ニテツニガ若菜テゴザル

あなをれとおちせらるる時よみくくもてまらさる

ほくゆれ

去日世は日ぬつそふやちろく人乃被ふりそへく人のゆくまじ

○^{ちろく}ひかく去日世ノ若菜ヲツニヤラ^ヤアレ白妙ノ袖ヲツテツツテ人ガイクワ

ちまふりそへの後いふ^ハ延とそちあのをそえとハ。假字ま異好相や。

歌三つと

在原のまね

去れまうをた乃しほもねき涙うまこ風ふくそみさるべらふれ

○春ノ着ル⁺衣ハ横ノ糸ガウスサニ山風ニサミケルデアラウサウニスル

室あは時きさのまはあふよめ。源むゆきのねは

それとゆるね乃みどりもまらまば今うしおれつらまらりまら

○イツモカラ又松ノ青イ色モ春ガキタハ^{ヒトホ}一入^ト添^トヤウニ色ガニタワイ

あそそまのまてあやせくまう時よみくくもて

つらゆき

日ぐせとがうもなるよあゆるごとけ野べ乃みどりぞ自まらりら。

○^一衣^一去れぬノフルタビニ世ヘニ^ニまの青イ色ガサ^ニかくニスワイ

日ぐせとが乃洗^テサ^テオ^テオ^テ。まあが史の衣さるといふ泡し飯材得まら。

去れ乃糸より加らる去れとぞみだして花乃ほろろびみきる

○糸ヲヨツテハホコロヒモスフ^テヤニ^ニ去イ^ニ柁ノ糸ヲヨリカケル春ノコロハ

あもぞ^ニケツクサ^ニ花ガ咲ミ^ニテ^テホコロヒワイ^ニほろろが^ハ花乃むくくそいふ。

あちちねそりりね極まらるる。

○を後一

〇七七

傳正遍昭

あさみどり糸よるどかまきしあつゝ家を玉ふもぬき家まはりやまぎこの

○アレアノ柳ヲ見レバ ウスモエギ色ノ糸ヲヨツテカケテ キレナ白イ糸ヲア

五ニレテツチイデサテモく見るナまノ柳カチ 鮎材ヨろ

歌一うらむ よろ人うらむ

かふもまへづるまをまはれどあつゝさすれどもまどゆりゆく

○まのヤナヤカヤ ちのオモロウサへツル春ハ物ゴトナニモカモ 改ニツテアタラシウ

ナルケレバ オレがけ身ハカリハサ 春ノ久々ビニぞくトフルウナツテイク

まぢろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山まぢろちぢろの山^山まぢろちぢろの山^山

○アチモコチモ業内モシラヌ此山中ニナニヤカ呼子鳥ガナイテ人ヲヨブガ ドコヤ

ヤラサテくア^とレツカリトシレヌ^とカチ

るぢろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山

九河内、新垣

まぢろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山

○まニナツまレバアレ雁ガカヘルワ 春ハアノヤウニソラヲトニデ北風ノ方ヘテチヤガ

コレハヨイトコロデユキアフタコトツケラレテヤラウカヨ

かぢろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山 伊勢

まぢろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山まじろちぢろの山^山

○オツケ花ガサクチヤニア けヤウニまノ産ノタツタノヲ見ステ、イヌルアノ春ハ

花上云モノ、昔カラナイ里ニスミナレタ^とカイ ソレテ花ノ面白イ^とヲシラヌテ

カナアラウ

餘材花るき里の説よりし。

花さつらば

よみ人しらす

そりつさば袖さきふちへうをねむりゆりさやうふらふひらひらぬく

○梅ノ枝ヲ折タニヨツテ ソデ袖ガニホフテコロアレ コニ梅ノ花ハアリモセヌニ

ヒ袖ノニホフヲ 梅ノ花ガコニアルトツカヒテ 鶯ガキテ鳴ク

オサキ
ウツ

色よりも色よりそめをばとねむりとおもひやとこが袖ぬきしやどの梅ぞと

○梅ノ花ハ色モヨイガ 色ヨリ 香ガサナホヨイワイアハレヨイニホヒヤ

ヒヤウニ

ヨイニホヒノスルハ 色ニレガ袖ヲツケニ梅ノ花ゾイマ

ふどちかや梅乃むくふどちかむくまづ人のあふあやまればと

○ムヤクナリヤニ 存ノ近イ取ニ梅ハウニイゾ 花ガサバ アリヨウ白ウデ 待

ハサモセヌニ ソスノ袖ノニホヒトリチガニルワイ

千秋云、梅うもど、花のつらき
あくとんねい。

梅ノ花しむらよるむらうきししと人乃とつむくふらうきとふらうき

○梅ノ花ノ下ヘチヨツト立ヨツタト云ホドノアツタガソカラ 人ノフニヲウツ

ヤウニサ 衣ガ香ニソツツナイ キツイ白ヒナモノヂヤ

ふめねむりつてよき 赤三條花のおむすうらぎ

さすねさしうらふてふらうきのさすりてかきむをかくぬやや

○ソウタイ笠ハツリヤカホラカクス物ナバ 鶯ガ笠ニヌウト云梅ノ花ヲツテ

吾ガ年ヨツタ形ガカクレカドウチャト ツリヘサレテ見ヤウ

銀さつらば

赤性法師

よきあのこつらととぎえしうきあふぬいろあきりておひら

○オレハアウチ今ミデハ 梅ノ花ヲタガヨソニバツカリサアハレタナリカナトモ
テニテ居タガ 梅ノ花ノドモイヘヌ色ヤ香ハ 折テカウ進ウニテクダヤ
又ヨソニヌヤウナリデハナイ 結句ヨシ

梅ノ花ヲ見て人ト云ハリキ
さうこのこと

君はさうでも色あうえき梅ノ花ハ折るともあきもさう人か
○此梅花ヲモテ誰ニ見セウゾイ 色デモ香デモ ヨウ知テ居ル人
ガサ ヨリアレハヨウレリス ンレヲ知ヌ人ニ見セテハ ナラセモナイコサ

うそをいふやういふべし
さう山とてよめ
つらゆき
うそをいふやういふべし
さう山とてよめ
つらゆき

○梅ノ花ノニホウ喜サキノコロハ 暗山ヲクライ 夜ニコエル時デモ 梅ガ
サイテアルト云フハ 又エイデモソノ句ヒデサ ヨウニレルワイ

月夜ハ梅ノ花ヲ折テ
みづ

月夜ハ梅ノ花ヲ折テ
○ハテヨイトコロフ一枝折テヤラウト思ウガ 月ノ影ノサス
ミナオチレヤウニ白ウニエニヨツテ 梅ノ花ガソレヲトドモヌカレヌ
白ヒラタツテ行テサ 知ラウヨリホカハナイ

喜ハよ梅ノ花ヲ折テ
喜ハよ梅ノ花ヲ折テ

○春ノ夜ノ寫^{ヤミ}ト云モノハワチク又物チヤナセト云ニ梅花が暗^{カク}ウア色コソエエ
子香がカクレカ香ハナボクヲウテモ隠レセ又色ハカクレテ香ハカクレテバ隠レテ

モノレ隠レ又デモノレトチラヒワチク又又^{ヤミ}闇チヤハサテ

ニカタ長谷ハニヤルタビニトニツタイハ、冬ニ中絶ニテ上ラ
スミチソノチニメスグリデソノイ、イタリシタレバソノイアテニガニウスニハヤトハコレコノ
デほどへへはふりしとりにさばうた家のつるどかくささる
トホリサニカタノニデアヒカラスニツカリトルゲトト上テナレテニテニテニソコニサイ
おびむやどりハわるといひわくしゆりりれをそこおいて
テアル
正き梅むきくアそよめる ぼくゆき

人ちつとらんもつとびふちやハ花ぞむくしあふほひら

○人ハトウヂヤヤラ心モカハラヌカハツタカシヌガナ^ニミ^ニ取ハ梅花がサワガ

事タレバコレヤウニニカタノトホリノ白ヒニアヒカラスニホウウイノ

あけわどりに梅あつとをりきくはせぬ

伊勢

あぢふ流く川を花を足てきくきぬあし神やゆきおき

○流^ニレテイク川へ花ノ影ノウツタヲアノ水ノ中ニモ花ガアルトニテハイツノ春

デモタミサレテ折ラモセヌニヲラウトシテハソノ水デ袖ガヌレルガ今ノ年モ又ヌレル

テカナアラウ 詞云ふあしつるハ京極院の春乃池をさむ

あふねがう川とよめるハその池よりてまよるやとあをいふまべ

上句ニ之一と句を決めてらんぬべし

年^ニハへく花乃がことなるあつちりあつちりあつちり

○年ヲまきテ毎年春ハ花ノ影ガウツテ花ノ鏡ニナル水ハ花ノチリ

トキクノヒトガシラサニセウ

人のあけりうあけりき、橋の花をたぐいど老いさきまを
てよめ

おとくしとよきうりそひしちくちむらとつふはあふぶらむむ

○春ハサヲ物チヤトエヲ外ノ橋ニナラウテ 今年カラ始メテ知テ 嘆クサケラ

花ヨ ドウゾチルトエヲバホカノ橋ニナラヌガヨイゾヨ

花ノらば よみ人まらむ

ふさも人もまるとおぬらくくおむつくおむびそふんもやまむ

○山が高サニコスハ誰モホテ見テ賞祝スル人モナイハ橋花ヨ 人がニヤウ

クワニセヌトテ アリツラウセウナイ オレガハヤシテヤラウホドニ

又と里をわたりくもさめぬふぶら

いぶらくわがえふくさばまがまをまふもくらかろく

○山ノ橋ヲオレガカウ見ニクバ 霞が一メニドコモカモ立テカクテ 花ヲ

見セヌワイ サテモイチノワルイニ履カナ

深敷后乃あまなり花が若木橋の花をらせ給へん

をんてしよめ 花のおもたおあすうらま

年ノ娘もばよりひもあいなむあハあまをそく足さばおひもあし

○年ノ娘ヲ見ニシタバ ワタシモイカウ年ハヨリシタガ サリナガラ アナタノ

伝繁昌ナサルハ伝殿デカヤウニ花ヲ見ニスバ ナニモ物思モヨサリマセヌ

たゞさの院ゆてらくく減えてよめ

五、糸、業、お、終、花

母、申、に、し、も、え、て、ま、ら、く、は、ち、り、り、せ、ば、春、は、あ、け、の、ど、き、か、く、ま、り、^ほ

○イツン世中ニトイト極ト云物がナイナラバ ケツク春ノジブシノ心ハノドカニア

ラウニ極ト云物がアルデハヤウニロクト心ガサツイテ 吾モノドカニオモハヌ

銀ーらむと ーくーらむと

る、ど、い、は、も、れ、ま、い、と、が、お、さ、ら、く、む、よ、わ、て、も、こ、む、え、ぬ、人、乃、と、め

○岩ノ文ラハレハ早イ川ガナチバヨイニ ソシタラ内ニ居テエヌヌ人ノタメニアノ川

ノアチラナ極ノ枝ヲ折テキテ戸 ニヤゲニ持テイナウモノヲ 川ガアルデド

ウモヲリニイカレヌ

心乃さらくをそしよる こそせんは師

見てのともや人ふくくくく極花もどくふきりてあづかふさむ

○カウシテアノえりナ極 花ヲ見テ 人ニ名咄^ナスバカリテオカウイカイ

ソビテハ足タカヒガナイホドニ 手ニ折テ取テ持テイテ内ヘミヤゲニセウ

花ざのりゆ糸波見やそしよる

見はさバ柳 さくくをこりませめてみやこをきかぬふくきなりり

○け山ノ上カラカウ見はせバ 柳ノ青イ色ト極花ノ白イ色トヲコキニセテ

トニト錦ト見エルけニワタシトコロノ 京ノキキガサ 春ノ錦ト云モノチヤライ

ちくくは花乃ちくくおてそくは巻ゆるく波をぎれてよめる

きのととのり

色もろと何トむくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

早ウチルンイ 此結句のふまは一格に例す。詞のあをふおせよが

さう。 折れしひびきあわして、いづれもさきもさういづれ

さう。 折れし花乃ゆらふ。久しくそはざりし人のきこわ

る。 折れしよききる 久し人しづ

つどなりと名ふてそくしては折れし事にすれまゝ人もすうらき

○ 桜花ハアタナ物ヤト 名ニソツツテアレ ナカクアタナ物デハゴサラヌ 一年ノ

内ニモスレテナラハ 折れしサヌ人ヲサキドクニ今日ニテチラズニ待テ居タライ

スレヤスレウらまテモトセヌキ根ノアタナ心ヨリハ 桜ガハルカニシヤ

あへー 折れしつれおれ

まよふことハ昨日ハ香もゆりあはる。 消えハるも花と見え。 や

○ 昔ハ桜ハアタナナイ 業平ヲアタナト云ニヤルガ ソレヤ大キナチガヒチヤ

ワレガ今日もツタレバコソ アノ桜ヲ花ヂヤトハスレ モレ今日も来ラズバ 明日ハ

モウ雪ニカッテ降テヒウテアラウ タトヒソノ雪ニツタノガ消ズニハアツタテモ

雪ヂヤトコソニヤウチレ モトノ花トハスヤウカヤ

折れしはは 久し人しづ

さう。 折れしははあきとてさう。 折れし花とゆらふ。 久しくそはざりし人のきこわ

○ 桜花ハチツテヒミウテカラハ ナニホニタウ思フテモ ソノセハナイモノヲ 折ルナラ

早ウ今日ノ内ニソソ折ウナレ 明日ハモウチレテアラウ

さう。 折れしははあきとてさう。 折れし花とゆらふ。 久しくそはざりし人のきこわ

○ 此桜ガアツリヌサニ一枝折テスヤウカト思ヘド 折テ取ルハ イカニシテモニア

惜イヤウチ物カナ サテノナトセウヅ イヤク折ルハ惜イコトヤニ ドヤハ木
ノ下デ宿ヲカッテ居テ 花ニテハソノニテスヤウ

きはわかれ色

栲色にあらとハぬく 漆てきむ花ハちと好き 後ハ形見イ

○花ハオツケ花テニウデアラウソノ後ノ形見ニキル物ヲ栲色ニコウ漆

テ着ヤウヅ 。千枝云はさくく色といつハ、うぐい栲の花の色かといつは、
栲色といふは、さくく色といつハ、うぐい栲の花の色かといつは、

さらさらぬぬ乃さけさき 涙ふまうてきくわき人よ

よみくわたりき みる

家なむれ花んかてしおまゝ人よ 花好む後をさくくべき

○コチノ花ヲ見ガテラニるまテクル人ハ 花んガテラノコトバ 花ガチツタラモ

ウ事ハスイヤニヨツテ 花テニウタ後ニサ 其人ガえシカラウ

真ノ子流のち合の時よき

伊勢

見取人も好き山ざやむれ 花らうと花ほく花好む 後がさかき

○オチテ見ル人モナイ山里ノ栲花ハ ヨソホカノ花ガミチ花テニウテ後ニササ

カウコトヤニ 今ハトコニテモ山ニ花ハアルヤニヨツテ ソレテ遠イ山里ナドハ

誰モスニクル人モナイヤガ ホカノ花ノ花ガモウイジラニカッテカラク

イヤトモまゝイ取デモスニクルデアラウワサ

古今和歌集卷并二巻鏡

春歌下

歌しらすむ

よき人きりば

まがほしむゆむむ心乃さくくあうらむむや色うらむゆ

○花がタナヒイテも庭へ色ノウツテ足元アノ山ノ梅花がチラウトテヤ

ラ庭ノ色ガカハツテキタ

まてとつふちうでーもあおるる何をはくくお思ひまを海

○チリカツタ梅ニ向テニバラチチズニ待テクレト云ノラヤ入テソレデハビデモチラズ

ニ留ル物ナラ何ヲ梅ヨリニカツタ物ヤト思ハウゾソレハモウ世中ニ梅ヨリ

ニカツタ物ハアルニ惜イニ早ウチルバツカリガアツタラ梅ノキズヤ

のころわくくちうぞをてに梅むむてよの中をてはうらむむ

○ワウカテウザクト妙ツテアラウヨリカツリト妙リナニ早ウおテニ

ウノカサアノかウチヲヤ梅の花ハ世ノ中ト云モノハソウタイ何デモ長

ウアバカラズニイキチカワイ物ナレバサ

此里うらむび福しぬを梅むらりはまがひおあまをて

○コヨヒハ此里デトミラウフヤハヤウニオモシロイ梅花ノチルニギレニ肉へ

イヌルヲバヒガサズニサ

うつそむむもあうこの花ざくくゆくと足まふくつあふり

○梅花ハサ咲タワト思タウチニハヤカカ方カラおテニウタイ人間ノ

一生ノアヒガハナノモノイ物ヤガソニミアヨウ似タカチ

傳正遍昭^うりよみておろりき家

あはれとみ

梅^うちら^らばら^らく^くわ^わむ^むち^ちら^らば^ばそ^そめ^め人^に乃^もき^もて^も見^み好^くく^り

○遍昭^{へんせう}傳^{でん}が大方^{たうほう}此^{こゝ}花^{はな}ヲ見^みニ好^すテク^レラ^レデ^アラ^ウト^モフ^テ 毎日^{まいにち}一^{いち}テドモ^も見

エヌ^{えぬ} ケ^けラ^らデ^で見^みエヌ^{えぬ}カラ^らハ^ハ モウ^{もう}大^{たい}方^{ほう}見^みエヌ^{えぬ}デ^でアラ^らウ^ウ ス^すレ^れヤ^やヨ^よイ^いワ^わ梅^う花^{はな}ヨ

チ^ちラ^らヲ^を手^てニ^に数^{かず}テ^てニ^にハ^ハサ^サ チ^ちラ^らニ^にア^あツ^つテ^て在^あリ^りノ^の人^{ひと}ガ^が事^{こと}テ^て見^みモ^もセ^せヌ^ぬ

カ^かヤ^やウ^うニ^にヨ^よミ^みユ^ゆエ^え目^めニ^にカ^かケ^けハ^ハ已^い上^{じやう}

梅^う花^{はな}乃^もち^ちら^らば^ばら^らく^くわ^わむ^むち^ちら^らば^ばそ^そめ^め人^に乃^もき^もて^も見^み好^くく^り

そ^そう^うく^くは^は原^{げん} 兼^{かね}均^{ぐん}

梅^うち^ちら^らば^ばら^らく^くわ^わむ^むち^ちら^らば^ばそ^そめ^め人^に乃^もき^もて^も見^み好^くく^り

○梅^う花^{はな}ノ^のチ^ちル^る形^{がた}ヘ^へキ^きテ^て見^みバ^バ 時^{とき}弟^{てい}ハ^は春^{はる}デ^でア^あリ^りナ^なガ^がラ^ら 吾^{われ}ガ^がサ^さチ^ちラ^らク^くト^とフ

ツ^つテ^てチ^ちキ^きニ^にハ^はキ^きエ^えニ^にク^くイ^い 吾^{われ}ノ^の君^{きみ}ハ^はソ^そノ^の消^{しょう}ル^る物^{もの}チ^ちヤ^やニ^にコ^こハ^は正^{せい}ノ^の君^{きみ}デ^でナイ^い梅^う花^{はな}バ

ナ^なチ^ちヤ^やニ^にヨ^よツ^つテ^てサ^さ

。ゆめ云。おのむらさき花のちるさうらうハくわくおるささる
といふさきお花とちるとと下とあはつるなり。

梅^うの^の花^{はな}乃^もち^ちら^らば^ばら^らく^くわ^わむ^むち^ちら^らば^ばそ^そめ^め人^に乃^もき^もて^も見^み好^くく^り

そ^そせ^{せい}の^のわ^わり^りし

花^{はな}ち^ちら^らば^ばら^らく^くわ^わむ^むち^ちら^らば^ばそ^そめ^め人^に乃^もき^もて^も見^み好^くく^り

○サ^さテ^てモ^もノ^のア^あツ^つテ^てラ^ら花^{はな}ヲ^をヤ^やウ^うニ^にチ^ちラ^らヌ^ぬ風^{かぜ}メ^めガ^が逗^と留^{りゅう}ニ^にテ^て居^いル^る取^とハ^は名^なズ^ずハ^は知^ち

テ^て居^いル^る者^{もの}ガ^がア^あラ^らウ^う 誰^{たれ}ガ^が知^ちテ^て居^いル^るゾ^ぞオ^おレ^れニ^に数^{かず}テ^てク^くイ^い ソ^そノ^の行^ゆテ^てソ^そノ^のア^あツ^つテ^てラ^ら

恨^{うらみ}ニ^にヨ^よイ^いハ^はウ^う

う^うら^らん^んの^のわ^わり^りし^し梅^うの^の花^{はな}乃^もち^ちら^らば^ばら^らく^くわ^わむ^むち^ちら^らば^ばそ^そめ^め人^に乃^もき^もて^も見^み好^くく^り

そつろく法師

いづろくろく法師もちろむ一さうりつじねば人おうらめしむ

○はヤウニ極ノ早ウ若テニウノハアノイ料簡チヤ ドロヤ極ヨオレモイッ

ラヨニ若テドウナリトナツテニハウ 人ト云物モ一サカリ盛リナ時カアテ

ソガ過テオト只チチバ 老ホテテシレモナイヤウヌ人ニ見ラレデアラウホトニ

ういふ事ありき人のまゝむきまて加りにけり後およそそ花

りけりそつろくろく けりゆき

一先スー若もやうとけりけりやまもちてちふちうあむ

○はるチヨットキテ足テイナニヤツタ人カ 又ガルカト 今日「日ハア待テニテ

ソレテゴザラズバ 千ケラチツタガヨイ 極花ヨ 太カ多今目ハガリサウチ物チヤ

このけりけり法師てよあ

まもるふかくまゝむさうあちうまけいふもえぶきゆのそ

○ち夜ハナゼニハヤウニ極花ヲカヌヤラ ユルリト足ル「ハナラズトセメテハ技

カラチルアヒガナリトアヒヤウモノヲ ソノるサハ度デヒエヌ

ららそそおひてまづけいけりあふあわつとそあつ

しこそしのをけりきりけいけいあまけり極乃ちりあそあ

ちらまうらりあてよあ 養系よあうけおる

くちあめしきあゆくへもちうぬまふまらり極もろろひふたり

○ワシハアバイガフルウテ 帳ノ帷ヲオロシテヒツコモツテバカリ居テ 春モ

イクカヤラ日ノるニイクモシラヌニ 嘆タラ足ヤウくとらウテセツカシ

待ッタ梅モ ハヤハヤウニウツロウテニウヌライノ

東宮の雅院おてさくら花乃みうハふちりてるが

とらふ見えてしらるゝ ともかく高世

枝よりもつごふちりやいむまねバおちてもうはあまともさあそ

○水うへチツテ流ル梅 花ガアレトツト沫ノヤウニエル 枝カラモモロウヌタ

花チヤニヨツテ 下ダヌテモ又同クアヤウニモロイ水ノ沫ニサナルヤウ

梅のむちちりらとよる ぼくゆふ

おとろくバさくばやハわらぬ梅もるるまゑまへりちけむちり

○トテモハヤウニ早ウチルクラ井ナレバ「向ニ」ヨテカラサカヌガヨイニ ナセニサカズ

ニ井ヌツ梅もハ ハヤウニ早ウヌテハ 足テ居ルコトチガハガサウクトヒテオチツカヌ

チヌおとろくバの花いと相ぞわし。此句もいづとも右の譯のこと
を以てえべきし。例を考へ合せて味あべし。

梅のおとろくちりらとよる人のしむとばよる

はらうの花さくちりらとよるおとろくちりらとよる

○オレハ梅もハ早ウチル物チヤハユレヌ ソレヨリハ人ノ心がサアヌナモノチヤ

ナゼト云ニ 梅ハハダ風ガフカキメ ムツタニチリモセヌガ 人ノ心ハ凡ソクテモニ

ムニ早ウツル物チヤウサテ 縁杖下巾のほろろし

はらうの花のちりらとよる きのあがり

おとろくこのひくとのどきねまき日おちげんちりらとよるちりらとよる

○日ノ光リノドカナユリトシタチノ日チヤニ ドウ云フデ花ハハヤウニ

サワト心ゼワレウチルコトヤラ

春トウガラまぬチちカの陣ぢしふてさらくらぬむのちらん
らんぬ

後あよりいせ

春風ハもぬわらりはよきてあけらぬづらやうらぬとんき

○春風ハ花ノ味テアルアヌリヲバヨケテフチ モレ風ハフカイデモ 花ハジ

ブンノ心カラヒトリデニモチルモノカト タメヒテヌヤウニ

さららのちらとよめら 凡れ何れみつね

春のぬむぶらくをはらくら花いふちとう風のぬくらむ

○サクラ花ハヒトリデニモ ヒタスラの春ノヤウニフルモノヲ ソレふアルニいがけ上ら

ドノヤウニチレト云フデ風ハフクコヤラ

しえぬのぢりてかりまりでまりてらせる

はらぬら

ふきみえつわがらくらくらぬららぬふまりをんらりゆり

○アノ橋ノアル取へ行テ足テ折リタカツタケレバ 心が高サニエノボライテ 跡念

ナガラオレハヨソニヌイくキタニ 風ハアノ橋ヲ心ニカセニスルデアラウトハレル

餘たらぬの後よりいせ

後あよりいせ

一本 ちあらぬねい

春のぬむハらくらくらぬららぬふまりをんらりゆり

○橋ノチヲ惜ミヌ人ハナケレバ けヤウニ此等喜ぬノフルハ 世ろノ人ノ

橋ヲヲレ惜ミテ泣クナニメカイ

亭子尾、言合はる

はるゆき

梅むらりぬる風乃なむらりぬるおきやお伝がくもらるる

○梅ノ花時ニ風が吹タテ、も花がバラク中^{ナカ}テサワケキハ テウド浪ノツ

ケキヤ ソシテ海ベニナゴリトエガアルもナリハ浪がヌツチヤガ 花ヲ

ナラシメケ風ノアトノナゴリニ、あノアリモセヌニサ浪がヌツワイ

なつみくぢのゆき

ぬるゆきくぢりやーなつみくぢやこおも色いづづむらり咲き

○元イ昔ノ都ニナツテニウタケ奈良ノ京ニモ ヤヅリ色ハ昔ニカハス都^ノデ

アツタ時ノトホリニ花ハサイタワイ

喜はるゝとてよめる よーみはむらり

花の色ハ庭ノこもてんきげもあそぶぬをの喜はる風

○花ノ色ヲバ庭ノ中ニコメテオイト見セズにセメテソノ香ヲナリトモ 庭^ノ中

カラヌスミダシテキテ コハモニホハセイ 喜ノアノ山ノ風ヨコレヤ

完あめときまのまはる言合はる 素性法師

花のあもいさほりゝ色ド喜そばうらな色ふ人なうひきり

○花ノ咲ク本モモウカラハ ホツテホテウニイ 喜ニハ花が咲テ早ウ

ウツロウ色ヲ見ナラウテ人ノ心モウツロヒヤスナルワイ

歌あゝど よー人ーらだ

まはる色乃いづづな里のわじ咲はるむらり

○春ノ色ハドコモカモヒラニイタバ イキワツタ里トイキワツタ又里トノ

ワチハダハアルイニドウユコテ花ハ咲タ取トサカ又取トガアルコヤラ

まぢうとそしとあゝ つゆに

之端山を志うとかくはうまがまを人よりまうとぬ花やはくらむ

○サアノ三端山ハキツウカヌダコナ^ニハヤウニア^ヒノ隠スハ此山ニハ
人ニシラヌナイヨウノ花ガアルカ^ヤニラス

うまぬしのまぢもふ花又おまうと心乃わりふ
まかとりりるあふよあ そきん

ワどりやままぢ山べりゆいどおむとまぢあまぢ花の陰うら

○ドレヤケフハ日ノラレルデモ^ハはまノ山ベラカケアルイテアソバウゾ 日ガクレタトテ
モ^ハ花ノ陰ガナササウナカイ^ハイクラモ花ノカゲガアル^ハモレ^ハモレタナラ^ハサイビチヤ

花ノカゲニトミラウワサテ ながハなハきおしげハ何げとおろく

いふ細し 打吹おげのほろろいふさるばとつふくねをぞ。

まぢあとしてよわ。

いつまじうおまべり心乃何んがまぢ花いちぢもあまもへぬべー

○花ガチラズバ^ハイツデハ野^ニ心ガウカレテ居ルデアラウ^ハモレ花ガチラズニ
アツタラバ 千^ニ年^デモ^ハケサデタテウヤウニスレル

銀しらび しみぢうしらむ

まぢあ花乃らうりハ何れとおぢど何い又むとハ今をうりる

○花ハ今年チテモ又来年カラ後モ春ゴトニ盛^リハアラウケレドモ
ソノ盛^リニそて見ルハコチノ今^ハオチヤワイ ナ^ハボ^ハ花ガサリガ毎年アツ

テモ命がナケレヤ又ト足ルハナラヌ サウ思ハバア、終リガホイ花ヂヤ

花のおどろきの子ねくくバるうー 昔は又とかなりきねま

○花ハチツテヒウテモ 又春ニナバ 年々お整ラズ定ツテ咲ク物ヂヤガ

世ノ中が花ノトホリニ定ニツテカラヌ物ナラバ 是レテキタ昔モ 又フスビ

カ、ツテクルテアラウニサ 世中ハる昔ガフタ、ビカルト云フハナイ

吹風うらうらうらうらものねくくバ此一本ハうらよとくくぬ

○吹テル風ニ頼ニテイヒツチエ、物ナラ 此、花一本ハヨチテ吹テクレトイタ

ニ サウ云フハナラヌモノナレヤ ドウモ散テモセウフガナイ

まの人もこぬものゆゑうらうら 常々なきつる花とくくアてま

○は花ヲ馳走ニ折テ生テオイト 本々ナラバ見セウト云テ 待、人モ本モセヌニ

ア、鶯ノオモシロウ唱テ井タアツタラ花ノ枝ヲオレハ折タワイ サテモヲレイ

コトヲニタフカナ 待ツ人が来ヌクラ井ナラ 折ラ子バヨカツタニ

こぬものゆゑおハ、来もせまふとつふとこ

寛政の時きよのまはる合はら 花系おきくせ

はくちを子種あぐくにあどねとどくも色うハ喜涙恨とくそ

○ヨニ春サク花ハイロクアルが何テ花デモ皆アタナ物ナレド ソレデモ誰か春

ノ花ハアダナトミテトニトニカギツタ者がアルゾ アタナ物ヂヤくハ誰モイヒツ

咲チバ又ヤハリ賞叙スルギヤ 餉材後の説きさら

春を度ハ海のちうさふんつうハしめねびくくハ花はうきか毛

○春の色がイロクニ足ルハ、も度ノ冬ヒイテアル中ナウ花ノ色が赤徒へウツ

夕ノカイノ

在来エ方

かきこしや川を流るる水は花の香を運ぶ
○庭ノ立ッテアル春ノコロノ山ハ遠ク見エルケレバ カズツ遠クモナイカレテ 吹
テクル風ハ花ノニホヒガサスル 此花はまはるる花を運ぶ

うつろふをえてよめる みつね

花をばらばらと散らしてうつろふ色あはいで人をもとめ

○ウツロウタノ花ヲ見レバ アノ花ニヤトモウ心ガ花ニシミコシデ コチノ心ニデガサ
花ノ色ニウツノイタワイ けやうニ花ノ色ニウツノイタワイ ドウゾ^カイロニハタヌミイ
人ガ知ラウモレヌホドニ 人ガ知テハアノリアハウラレイノチヤ

赤閑と流るる 飯村の流るる

凱歌

よみ人

うぐいさをばらばらと散らしてうつろふ色あはいで人をもとめ

○暮ノナク野へ軒テ見レバ ドコノ^こモク ウツロウタノ花ヲ風ガ吹テチラスワイ

暮ガ惜^いガツテナクハダウリチヤ 夕暮云ニのちのおとふとつふはハトのちへんけい
んたべい。まてんまへちかからん。

吹風をちかきてうぐいさをばらばらと散らしてうつろふ色あはいで人をもとめ

○暮ガオレガチカクハオホテ恨メシサウニ鳴クガ ソチハ花ノチルガ惜ウテ恨ミルヲ
アノ吹テクル風ヲ恨ミデナサ オガアノ花ニチヨツトナリモ^い手ドモフレタナラコソ
オレヲ恨ミヤウチレ オレハ手モフレハセヌゾヨ スレヤコチガ知タ^いテハナイワサテ

典侍 洽ふ 飯村

○ダレカレサソヒアセテ 馬ヲフリナズテ打ツテ ドレヤ見ニコカウゾ 此弟一フル
京ハサゾヤ 吾ノフルヤウニサ ヒタクト花ハキレテアラウワイ

ち花をなふううみむ 吾中に 花オももとふ 何くむ 抱くは

○花ノキツテユクヲ 何テ恨メシウハウゾ コチが身トテモイツデモハ世ニカウ
シテアラウモノカイ 花トハシヤウニホツケ死ニテユク物チヤ 花ハカリヲ早
ウチルトテ恨ミヤウヤウハナイ

小野小町

花の色ハうつりふとわづづ ぶが身よふゆ ながめせーヤふ
○丑エー花ノ色ハアレモウウツウテヒニウタワイナウ 一衣モズズニサ ワレハ
ツレンテ居ル男ニツイテ 心苦ナリガアツテ 何テトシチヤクモナカツタアヒタニ

長雨がツタリナドシテ ツイ花ハアノヤウニア

さふふるとハ男女のかけりひまをさつハ男女は中らひのこもさーも
中らといつたまー 此糸衣の身にもしもかどつりいせ抱けり
まごうつまる係氏抱けまごさ成ちるぬまどつるとがひもこれし

仁和乃中おのみやまんだろ 何れおあふち合せん
り家時ふよもるる そせい

きーとあふんまひふよう 襦をむちらさ 雲ごとふぬきそむむ

○散テユク花ヲオイトヨフ心ハ ドウゾ糸ニヨラレ物ナラヨイニ ソレタラソ
チル花ヲ一ツく ^{いぶ}を糸デツナイデ チラヌヤウニトメテオカウニ
あがねふぐえふ女乃あやく 何つりもあによみくほり

ちりきん

ちりきん

あづさうたる花は心をばあもくれはさもあまを花ぞあはれ

○一春ノコロ山ヲ越テクレバ ドウモ道モヨケラヌホド 花ガチツテ

クルワイ アノ女等ガサ

寛平の御時まさののまはらう合のこ

まはらにこるはるむとあーおをたうあむおそこはまぞいぬ

○け春ノ聖デ若菜ヲツウトモテオタモノヲ アチラコチスチリ一ガウ花

デワカタツム取ヘユラ道ハ一キテフニヨウテ ソデモナイ取ヘキタワイコレヤ

山ちふさうでしりるよとあ

つる人のいちけ細きわのよハよと家一住るあべ

あざりてまはら心り花もあはれ花ぞあはれ

○ニ春ノ花ノチル時ニ山ニトツテ^三寐タ夜ハソノ花ヲ惜イクトモフニカ

美ノウチニモサ 花ノチルバツカリヲルワイ

寛平の御時まさののまはらう合のこ

吹風とあはれあまうりきむみんがらさ乃ををえさや

○フキチラス風ト流レテク谷川ノ水トガナイモノナラバ ミ山ノオクニカクレテ

咲テアル花ヲバニヤウモノカイ ニニハスニニ スヤ風ヤ川ノ水モ 花ノ又

メニメタニワライバカリデモナイモノガヤ

志あまのりかつりきまうまどと花あうりつりて

藤乃花乃あまあまよりてかつりらふよみまあ

くりまは

傍の遍取

よきふえてかつむいふゆぢの花をひすつをねよ枝のききり

○カツト立ヨツタガリデ足モメズニヨリニステイヌ人ニヒツウテイナス

ナモノ花ヨ タトヒ枝ハ折レルトモ ドウゾヒツウテイトメヨ

花ノ葉の葉はきりきり人乃しゆらりりりて

らんらんをよめる みつね

花をぢらあはるふらりねとまうりもだごふのそ人のんむ

○コチノをニ咲テアル者ノ花ヲアキヤウニ人がヒツタレクニテドモニステイ

ナレヤウニヒタスラニガ ドウユフヤラ エイをデモナニ

花ーらんむ よし人こらげ

いやうかもはさあやあしむらぶは小崎のさたの心吹のゆ

○タチノ小崎ノ崎ノ山吹ノ花ハケフコゴロカナるニサイテアラウ

柳白のハニつそとあやめ舞中今うらこ今もといふらんげ

よはらあやあしむらぶはあまへあつりー心あき花

○此山吹ノ花ワイ 春あニステ一入一サツタ色モドウモイヌニ 色ガリデ

ナレニ 香デガぬニステハ別ニテヒホラニウニホウ

香あ。鳥のさへもかきり。あのおひもあをれをまこるあじ。

心吹をちやあしむらぶはあまへあつりー心あき花

○山吹ハワチクタ、又物ギヤ コニナナラサカ又カヨイ 花ガサイタラニニホウト

ヒフテ極テオカニツタデアラウニ まん ちん方がコヨヒミエモセヌニ 咲テモ何ノ

セモノナイフヂヤ 嘆ククラ井ナラも所方が見ニニルヤウニテクエヤ ソンデス
嘆クカガアツテワククツトモノヂヤニ
急ガウナリ

よりの川乃ほろりふらぶきのさきさき 波さう

清らゆき

吉野河まきし枝やぶ物ふ吹れふ庭は 寂さへうつらひあうり

○吉野川ノ岸ナ山吹ラニ 風が吹テ木が ソノ風デ川ノ水がウクニ

ヨツテ 底ヘウツタ 寂デガチツタワイ

銀しうき しみくしうき

かみぐるみもはらふ吹ちるふらぶき花の盛あつたまふ 物ま

○一 井手ノ山吹ガハヤモウガテニウツワイ アノ残念ナコトヲシタ

ソツト早ウ 花ノサカリノ時カニニラヤウニオテニヤウデアツタモノ

はらのつらふのいしーもらぶはきよらとがうらむ

まはらうこそしよむら さまい

思ふぢもはらふべりーらむとてこそと いそぬ 旅痛しーの

○ソソデフソコハイクトニテ定ツタ旅デハ ヨソニトルノハウイ物ヂヤガ サウイテ

ツタ旅デハナレニ 心ノアフタドウレ春ノ山ヘツギツチイテ 「日ノシルミテ

アソビデ イキガ、リニトツテミタイモノヂヤ ソレハオモシロイ旅旅デア

ラウ 折ア、下ウはきこらうーかきむ。

まはらうこそしよむら さまい

つづきつらふのいしーもらぶはきよらとがうらむ おもわゆるか

○古より梓弓春トツケテヨシデアガ
 一コトニ月日ガ早ウツテ 矢ヲイ
 ルヤウニヨハレ、 春ニナツテカラマダナラモナイニサテモ早ウツタカチ
 一二月とよきハ、まゝハ年ハ善のち好まばうべし。まゝ乃
 善のち好まハ此月いふおきこ也。

やよひおきこはしき
 一ゆき

なれらむる花一はらもばうぢひをもていぬうくおりぬびうち
 ○ナニボ惜ニデアテモく 花ハミナおテヒウテ 鳴タデトル花ハナケレバコ
 デハセテナイコヂヤトミテ 善モレヒハ 鳴トモナウナツテアラウサウアリ
 ソナクニヨレルソデアスレウナカヤヤデ 飯村ヨウ

やよひのつごもりかこふをいへるふら川より花の
 ながれは川に
 ぬくやふ
 此人をくお始ていふ姓をいふべき例うお姓をい
 くと又お始ていふ名のおをいふとせはハむがことし
 花ちりるもはちあつていふはむがことし
 ○花ノおテ流レル川スヂニソウテ流くミナカミノ方へる子チキテ見レバ
 山ニハモウ花ハミナチツテヒウテ ハヤ春モナイヤウニナツタヤイ
 春ノおはむがことし
 ちりるもはちあつていふはむがことし
 ○春ヲ惜ムケレバモウ言セシトナリハセヌ 春ハモウタツテイル道へ旅ヲチニ名

バトラスズギヤ 庭の隅の隅に 花のハルハル
さくらんぼを 咲かすも 咲かすも 咲かすも
つぼみのまゝ 咲かすも 咲かすも 咲かすも

春ハ一年ノ内ニイクモオババニシヤガサウハナラズトセメテニ夜

トナリトオババヨケレニ夜トモクルカキ 名ツタニ夜ナラテハナイ春チヤニ
クレテユクハサテノコリオホイフヤ ウタヒスハズイブシ絶不鳴テ恨ミヨヤ
イイモモ鳴キドコロヤ

やよいのほごむり花つとむりかたりきる如ごとし

足してよも みつね

さむべきおはあゝおそくねもちるやごふもぐらうの

○アノ花ガアメリ惜サニ一本ノチツテユク花ゴトニコチノ心ガツイテイクワ
アノ女ニサテモアアホラシイフカナ ツイテイタトトメラウ物デハナイニ
折字みあころ

やよいのほごむり花のありきおぬぢ花をくして
人をつらうまゝ ねりあゝのねた

ゆきつぎちひてそりける年けうちふきつくとくはと思へを

○此後ノ地ハドウゾソモトへ依目ニカキウトねジテ 今日ノけあニスレクサ
ムリニ折リニタ 春ハダイクカモアルデハアルイ モウ當年ノ内ニタツタラ

一日ナラデハ春ハナイト とおもへむ ぬるにナリ

伝説下句女ををゆむ

亭子院 ち令一 ち令一 ち令一

ち令一

りふのこまをばもてぬるにふりしやるに花乃陸のり

○春ヲモウ今思カリヤトハ只又時デサへ いふか 花ノ下ハ立ッテイヌノガ何トモナイ

カサア ソレデ又花ノ下ハ立サリトモナイニ マシテケフギリノ春ヂヤモノ

ち令一のち令一

古事記傳

本居翁著

全四十五冊

此書ハ本居先生壯年の比よりごうごう生涯の学力を凝らして皇國才一乃書
しるしをなすこと一ははまのふのて千年餘もつとまする神の平き大道は
世ふじろをくま一本書やといやく今小技群し見識をの古來の注の非あり
てん城とつて一して誠心未嘗有の大波瀾の書ゆり異同録三巻ハ要用する所く我早く
披一垣んごめ大書をとりて老くをまゝ一りまゝ一重宝の書ゆり

神代心語

本居翁著

全三冊

神書をよみ古書成をまらまら古きをよくちでハ事より後く多しゆ一ゆ一此書ハ
古事記の神代をわき書となしてまら古きの要をちて一先兎臺の口はまいゆし
我皇國のい一の事記を口ちとちやんとてあふさる一あり

出雲神壽後釋

本居翁著

全二冊

出雲國造の神壽の祝詞ハある中よもいしく古き祝や一妙事幸のあを今まて世の
人のちるまてある我らちちし事なりし一は剛毅の存すれ一をね又一く考へれ書

